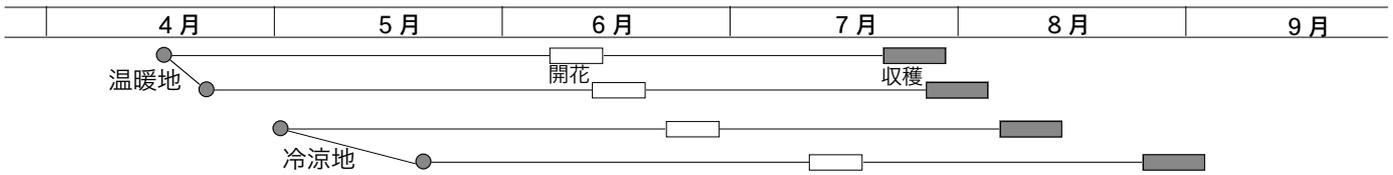


自然農法交配 カボチャ

《その特性と栽培のポイント》

【直播き栽培の栽培暦】



【品種特性】

品種名	草勢	ツル長	成熟日数	着果性	果形	果重 (kg)	果皮色	果肉色	肉質	貯蔵性	適地
ケイセブン	中	長	45~50日	良	扁円形	1.3~1.5	淡灰	淡黄橙	粉	良	普通~肥沃地
ふゆうまか	中	中	45~50日	良	紡錘形	1.4~1.6	灰	鮮橙	粉	やや良	普通~肥沃地
かちわり	強	やや長	45~50日	中	洋杓形	1.2~1.4	灰緑	茶橙	粉	極良	痩せ地~普通
カンリー	極強	極長	45~50日	中	コマ形	1.5~1.7	淡緑	濃茶橙	粉粘	良	痩せ地~普通

【栽培のポイント】

自然農法品種は、長期間保存しても品質の低下が少なく、冬期間利用できるカボチャを目標に育成しました。山形県内で冬の貯蔵野菜として栽培されてきた在来種の冬至南瓜を育種素材にして、土壌条件や用途に応じて特性の異なる系統を選抜・固定しました。自然農法品種は、これらを組み合わせた交配種で、何れも在来種の特性を維持しながら有機栽培に適する強さづくりやすさを備えています。少肥・無整枝栽培で育成し、吸肥力を高めているので、一般の早生系品種より元肥を減らす必要があります。また冷涼地に適した品種のため、高温下では草勢の衰えが早く、ウイルスの発生や品質の低下を招きます。昼夜の温度格差があることが高品質で日持ちのよい果実を生産する条件になるので、温暖地ではなるべく早く播種し初夏に収穫するようにします。また品質と貯蔵性を高めるためには、チッソの多施肥を避け、腐植を増やして根群を発達させ、充実した茎葉を育てることが大事です。

畑の準備

堆肥や緑肥などの有機物は、腐熟をすすめるためなるべく前年の秋に全面に鋤込む。春の鋤込みは完熟堆肥を用い、作付け1ヶ月前までに行う。未熟堆肥は鋤込まず表層に敷く。畦幅3.5~6mとり、播種する位置に直径45cm、深さ30cm位の穴を掘りEM生ゴミ土や混土堆肥などを入れて鞍つきをつくる。(鞍つきの作り方参照) 鞍つきは地面より6~9cm盛土にし、培養土があれば盛土の頂上にさらに三握りくらい施して土と混ぜておく。

播種

高温期に入るとウイルスが発生しやすいので、なるべく早めに播く。直播きはノダフジの開花や大麦が出穂する頃が播き始めの目安。遅霜の恐れがある場合は保温キャップを利用する。鞍つきに播く場合は、鞍つきの盛土の頂上をわづかに南向きに傾斜をつけると、温度が上がりがやすく、過湿に対しても好都合である。播き床を平らにし、その中央及び小指を開いたくらいの範囲に適当な間隔をおいて3~5粒播きつける。種子を平にして指先で深さ1cmくらいに押し込み、穴を埋めるように覆土して軽く手で押さえる。

着果までの管理

発芽から力強い大きい子葉、本葉を展開させ、太く詰まった節間でじっくり生育させる。5~7日位で発芽する。保温キャップで被覆したときは、雑草の発生も早いので早めに除草する。子葉展開から第1本葉展開まで1週間位、第2本葉まで12日前後、第3本葉まで17日前後かかる。本葉4枚で親ツルの15~16節までの花芽が分化するので、この時期に栄養過多や肥切れの苗にすると着果不良を起こす。

敷き草

幼苗期は地温を上げるため、敷き草は株元から20cm位離し、薄めにまわりに敷く。ツルが1m位伸びだしたら、風でツルが振り回れないようにワラや枯れ草を厚く敷く。

仕立て方

少肥栽培では根の生育が優先するため、地上部が過繁茂になることはないので無整枝にする。ツルがある程度伸びたら重なって混み合わないよう同じ方向に揃えてやる。株間40cmにすると親ツル1本仕立ての草姿になり、株間80cmで親ツルと子ツル1本の2本仕立て、120cmで親ツルと子ツル2本の3本仕立てになる。フキの葉のようになり過繁茂になる畑では、親ツルを5~6葉で摘心し、子ツルを2~4本仕立てにした方がツルがあげられすぎず着果が良くなる。畦幅は3.5~6m位とる。畦間、株間を広くとり仕立て本数を多くする程、根群の発達が良くなり、茎葉が充実して樹の寿命も長くなるので、畑の肥沃度に応じて栽植距離を決める。

着果時期

着果期の葉の大きさは葉幅で20cm以上が適切、これより小さいと果実の肥大が悪くなる。着果節位は15~16節を目標にするが、初期から生育が順調で葉が大きく茎が太くツル先が持ち上がっていれば、10節前後から着ける。逆に葉が小さく茎が細くツル先の持ち上がりが低いときは、18節以上から着果させる。草勢が強く過繁茂のときは、腋芽を除去して雌花の充実をはかる。

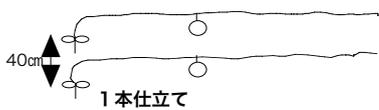
着果から収穫まで

カボチャの果実は開花後25日で収穫時に近い大きさに達する。この時期は畦間全体が葉で覆われる程度に広がっているのが順調な生育である。葉の横幅が35cm前後の大きさを目安に、これより小さいときは、ボカシ肥を追肥する。収穫時期は開花後45～50日を目安で、果梗に縦にひび割れが入り、果面の光沢が消えた頃。果皮が軟らかく、爪が簡単に入るようではまだ未熟である。収穫は晴天日、朝露が消えてから行う。果梗を落とさないように長めに切り、1週間位風乾してコンテナに入れ、日陰の風通しの良い軒下で保管する。自然農法品種はゆっくり熟していくので、収穫してすぐはホクホクした粉質で美味しいが、市販の早生品種のような甘味が少ない。(ケイセブンは甘味がのりやすく収穫して10日位から美味しく食べられる。)甘味と風味が増すのは、暖地で1ヶ月位から、冷涼地で2ヶ月位からである。保存期間が長く、長期間美味しさが保たれるので、貯蔵をお勧めする。長期保存をする場合は収穫後涼しい屋外などで保管するが、最低気温が5℃以下になったら果実の腐れを点検し、コンテナに入れ直してから屋内で貯蔵する。貯蔵場所は湿度が低く気温の変化が少ない方がカビの発生が少ない。高温、多湿にすると果実の消耗を早め、品質低下や腐れる原因になる。また氷点下まで下がると凍害を起こすので最低気温5℃位を確保する。かちわりの保存期間は温暖地で1ヶ月まで、冷涼地で3ヶ月までで、果皮が赤味を帯びてくるのが、過熟の目安である。

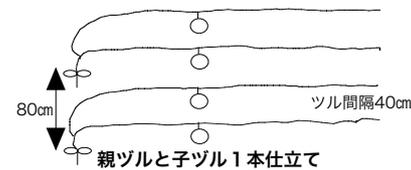
自家採種

自然農法品種は、雑ばくな冬至南瓜から選抜・育成した固定種同士を組み合わせた交配種なので、自家採種をした1年目は果実が様々な形、色にばらつく。不揃いでも市販品種と交雑しない限り品質や貯蔵性は冬至南瓜の特性を保っているのだから選んでいけば、畑に合ったオリジナル品種を育成することができる。冬至南瓜の中には様々な特性のものが混在している。果実では、「ほくほくした粉質とねっとりした粘質」、「甘味が早くから出るものと遅くなってから出るもの」、「肉質が緻密なもの」と「軟らかいもの」、「肉色が淡黄、濃黄、黄橙、橙、茶橙」、「果皮色が緑、灰緑、灰、白」、「大果、中果、小果」、「紡錘形、洋ナシ形、扁円形、コマ形」「大タネと小タネ、白タネと茶タネ」などがある。これらから嗜好に合ったものを3～5年位選んでいけば固定種ができあがる。タネ取りする場合は、「早く食べるもの」、「冬至に食べるもの」、「冬期間食べるもの」に分けて、その時期に美味しいものを選ぶことが大事である。自然農法品種は自家採種することによってもとの雑ばくな冬至南瓜にもどるので、その中からそれぞれの風土に合った新しい在来種を育成していただきたい。

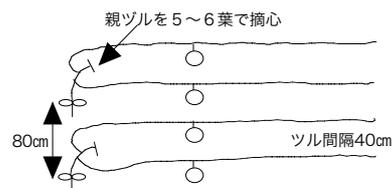
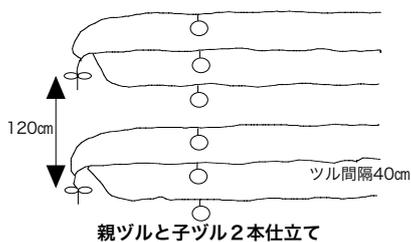
【仕立て方】



【1本仕立て】草勢がおとなしいときは無整枝にし、強いときは着果節までの腋芽を取る。1本仕立てでは1番果が早く収穫できるが草勢の衰えが早く、2番果が着きにくい。多肥栽培では、大葉になりやすく過繁茂になると着果不良を起こすので、元肥は控えめにする。畦幅3m位から。

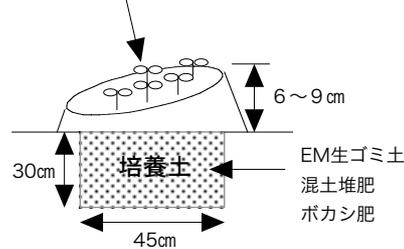


【親ツルと子ツル1～2本仕立て】草勢がおとなしいときは無整枝にし、強いときは着果節までの腋芽を取る。根群がよく発達するのでツル持ちが良く、2番果も収穫できる。少肥栽培や痩せ地に適した仕立て方である。株間を広くとり、ツル数を増やすほど根の張りが良くなり、草勢も長く維持される。畦幅4.5～6m位。



【子ツル2本仕立て】親ツルを5～6葉で摘心し、強い子ツルを2本伸ばす。草勢がおとなしいときは無整枝にし、強いときは着果節までの腋芽を取る。かちわりやカンリーのような葉が大きく強勢な品種に適する。また草勢が強すぎて落果しやすい畑では3～4本仕立てにすると葉が小さくなり着果も良くなる。早期収穫は期待できないが、一斉収穫できる。ツル数を増やすときはツルの間隔が40cmになるように株間を調整する。畦幅4.5～6m位

乾燥すれば下側の発芽、発育がよく、湿りすぎれば上部の発芽、発育がよい。



【直播き栽培の鞍つき】

盛土の頂上をわずかに南向きに傾斜させ軽く叩いて平らにしておく温度が上がりがやすい。種子を平にして指頭で1cmの深さに押し込み、穴を埋めるように覆土して軽く手で押さえる。発芽したら株元の雑草を早めに取って地温の確保に努める。

【カボチャ草生栽培のやり方】

